「私の不謹慎な家族の話」

まいごのカニ　（30 代）

まず様子がおかしくなったのが右隣に座っている次兄だ
なにか気を紛らわせるように頭を動かし、太ももに置いた手が握りこぶしを辞めて撫でるように動きだした
次兄は昔から感受性が強く涙もろいので、もしかしたら涙を耐えるために動いているのかと思いそっと顔を覗き込んだ

それが間違いだった

力の入った口元は唇を噛み故人を想っているように思えたがそれは私の思い違いで、次兄は上がりそうな口角を必死に押さえるために唇を噛みしめていた

目が合ったとき、次兄はしっかりと笑顔を浮かべて
「お経のクセが強すぎて…」
と私にしか聞こえない震えた声で伝えてきた

そこから私へ伝染した

経験は少ないが確かによく聞く一般的な？お経とはちょっと違い、抑揚や音程、韻を踏んだような詞が意識すればするほど心の良くない場所に突き刺さる
前に座る長兄は一度振り向き険しい顔をして私たち 2 人を見た
長男らしさを詰め込んだような長兄の事だから、不謹慎な立ち振る舞いを怒ろうと思ったのだろう
だがひどいことに私たちは長兄の想像以上に笑いをこらえた顔をしていた
次に振り向いた長兄は「おい、勘弁してくれよ」と言い、眉毛を下げてえくぼを作っていた

こうして長兄にも伝染した

こうなってしまうともうどうにもならない

私たち兄妹は仲が良くお互いのツボはよく知っている
この空間は間違いなく私たち兄妹のツボの空間だった

意識をしてはいけないと思えば思うほど苦しくなり、お坊さんも私たちを笑わせたいのか？と思わせるほどお経は白熱していく。
立ち上がり動きが大きくなり何かを投げる動きが増えてきた
「「「(いやいやいや、おかしいだろ)」」」
と小声なのか心の声なのか 3 人の気持ちが一致した時に
私たちの数列前、親族代表の直ぐ側に座るよく知った後ろ姿がケタケタ肩を震わせていたのに気付いた

私たちの母だ
泣いていない、あの背中は絶対に笑っている

「「「(いやいやいや、あんたは実の父親の葬式だぞ！)」」」
私たちは声に出さずとも母の肩の揺れを見てツッコミを入れた
あたりまえだが母の左右に座る親族たちは一人も笑っておらず、あの空間で笑いを堪えていたのは母と私たち兄妹の 4 人だけだった
喪主である祖母は真剣に思いを馳せているというのに、その真横で母は肩を縦に揺らしていた
その事実に耐えきれず私たち兄妹は声を出してしまったのだと思う
そっと母がこちらを振り向き「(やっぱり笑うよねー)」という顔で私たちを見てきた

その空間に堪えることなく笑顔だった人がもう 1 人
それは楽しいことが大好きな遺影の中の祖父だ
幸せな笑顔を浮かべていた祖父と母の笑った顔はよく似ていた

きっと祖父似の母の遺伝子を受け継いだ私たち兄妹は、あの空間で笑うことを許され、それが祖父からの最後の願いだったのかもしれない

（ということにしてもらおう）

本当に不謹慎な話だけど、この家族に生まれてよかったと再確認できた大事な日となった